

平成27年度 国立情報学研究所 実務研修報告

筑波大学附属図書館
(図書館連携・協力室 実務研修生)

浅野 ゆう子

目次

1. 自己紹介
2. 研修テーマについて
3. JUSTICE事務局での実務研修について
4. 研修を振り返って

1. 自己紹介

- 筑波大学附属図書館に採用
- 情報サービス課歴11年
(相互利用係・医学図書館・レファレンス係・大塚図書館)
- システム管理係 3年
- 2012年4月～ 雑誌受入担当 JUSTICEが少し身近に
- 2014年4月～ 電子リソース担当 現在2年目
電子ジャーナル・データベース・電子ブックの契約、支払、
管理業務
- 2015年6月1日～8月31日 JUSTICE実務研修生

2. 研修テーマ

電子リソースの利用統計の収集・分析とその活用方法に関する調査

- 2.1 利用統計の概要
- 2.2 調査内容1: 統計の活用方法
- 2.3 調査内容2: 統計の収集・管理
- 2.4 調査を通じて感じたこと

研修テーマ

- 「電子リソースの利用統計の収集・分析とその活用方法に関する調査」
- 冊子と違い利用状況が把握可能に
- 図書館が電子リソースの有用性を判断する根拠として、利用統計の活用は課題の一つ
- どのように分析・活用すればいいのか？
- 適切な取得・収集方法とは？

研修テーマへの取り組み

- 利用統計の管理、分析に関する各大学の現状調査
 - JUSTICE運営委員・作業部会委員に対するアンケート調査 (6/23-7/2)
回答館24館
 - 聞き取り調査 4館 (京都大学・慶應義塾大学・東京工業大学・早稲田大学) (7/9-7/24)
 - 報告書等の参照
- 利用統計に関する基本情報の収集
⇒『電子資料契約実務必携』の改訂へ



調査項目

- 統計の活用方法

統計を使用した購読の見直し・その他の活用方法
利用統計活用における問題点

- 統計の収集・管理

統計の収集頻度

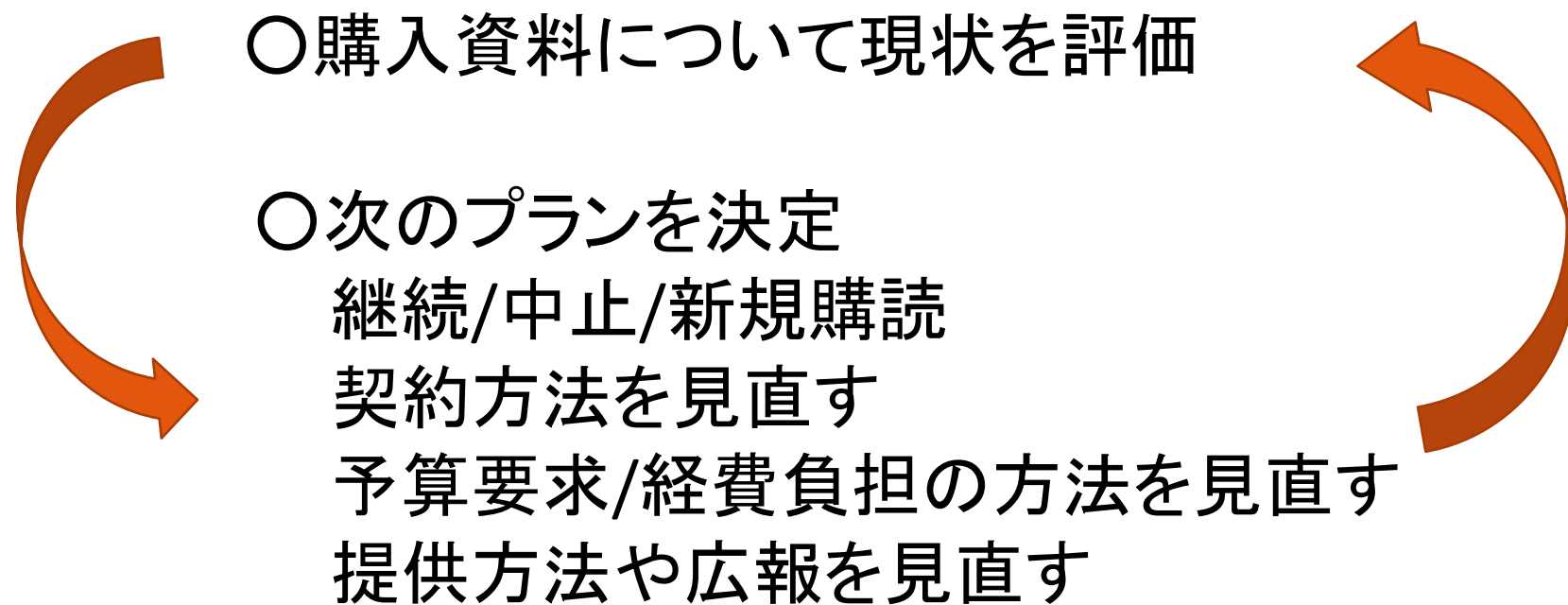
収集対象としているプラットフォーム数、統計の種類

取得した統計の管理方法

統計管理ツールの利用

私たちは何のために利用統計を必要としているのか？

調査結果から浮かび上がってきた枠組みは、



⇒より良いコレクションの構築に繋げる



では具体的には何を見て評価しているのか？

2.1 利用統計の概要

評価を助ける統計:COUNTER

- 出版社が異なっても、同じ基準の統計データで比較・評価したい→COUNTER(Counting Online Usage of NeTworked Electronic Resources)の登場
- 2002年設立の非営利団体
- 出版社等の提供元と利用者側の図書館関係団体が参加。JUSTICEも会員
- 目的:オンライン利用統計データを、比較可能で、矛盾がなく信頼性の高い方法で記録、提供するための国際的に標準化された実施規則(Code of Practice)の開発
- 実施規則の現行バージョンはCode of Practice for e-Resources (電子資料資源のためのCOUNTER実施規則)リリース4
- 対応ベンダー(出版社)数: 78 (2015.8現在)
<http://www.projectcounter.org/compliantvendors.html>

COUNTER統計で分かること

- 23種類のレポート(標準:13種類、オプション:10種類)

雑誌レポート	JR1	月別・ジャーナル別 フルテキスト論文リクエスト成功件数
	JR1GOA	月別・ジャーナル別 ゴールドオープンアクセス フルテキスト論文リクエスト成功件数
	JR2	月別・ジャーナル別および分類別 フルテキスト論文アクセス拒否数
	JR5	出版年別・ジャーナル別 フルテキスト論文リクエスト成功件数
データベース・レポート	DB1	月別・データベース別検索、結果クリック、レコードビュー総数
	DB2	月別・データベース別および分類別 アクセス拒否数
プラットフォーム・レポート	PR1	月別・プラットフォーム別 検索、結果クリック、レコードビュー総数
図書レポート	BR1	月別・タイトル別 タイトルリクエスト成功件数
	BR2	月別・タイトル別 セクションへのリクエスト成功件数
	BR3	月別・タイトル別 および分類別 コンテンツアイテム・アクセス拒否数
	BR4	月別・プラットフォーム別および分類別 コンテンツアイテム・アクセス拒否数
	BR5	月別・タイトル別 総検索数
マルチメディア・レポート	MR1	月別・コレクション別 マルチメディアコンテンツへのリクエスト成功件数

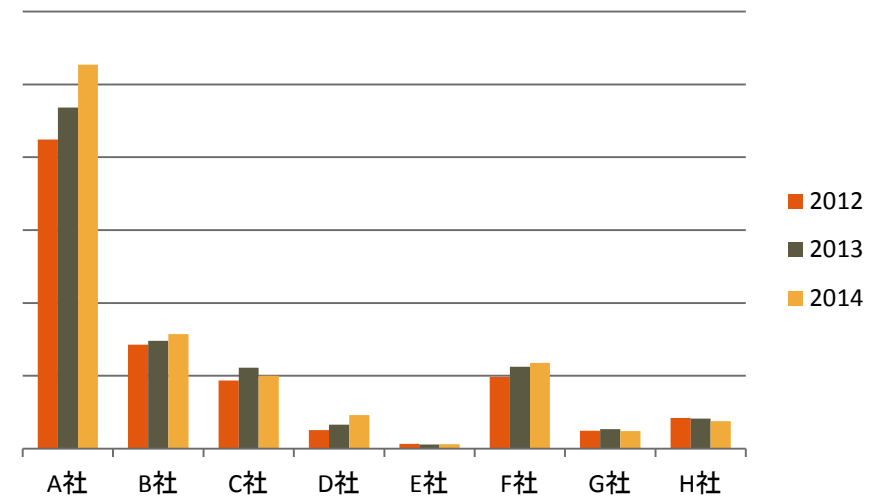
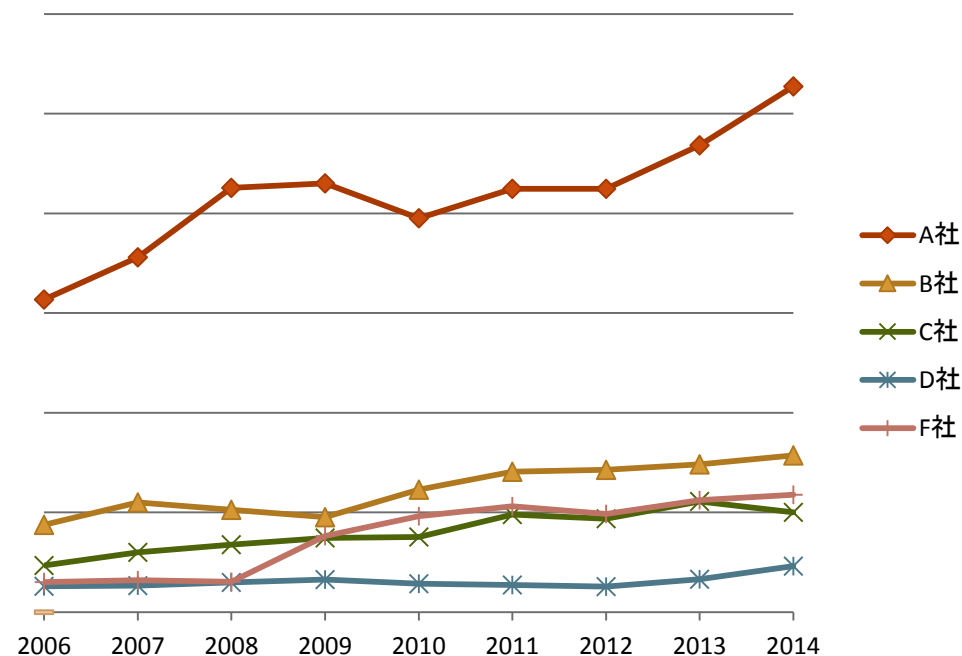
COUNTER統計の例: Journal Report1

- ExcelもしくはTSV,およびXML形式で提供
- ファイルのフォーマットの統一
- データ処理の指針も規定（意図した利用のみをカウント: 短時間の複数クリックは除かれる）

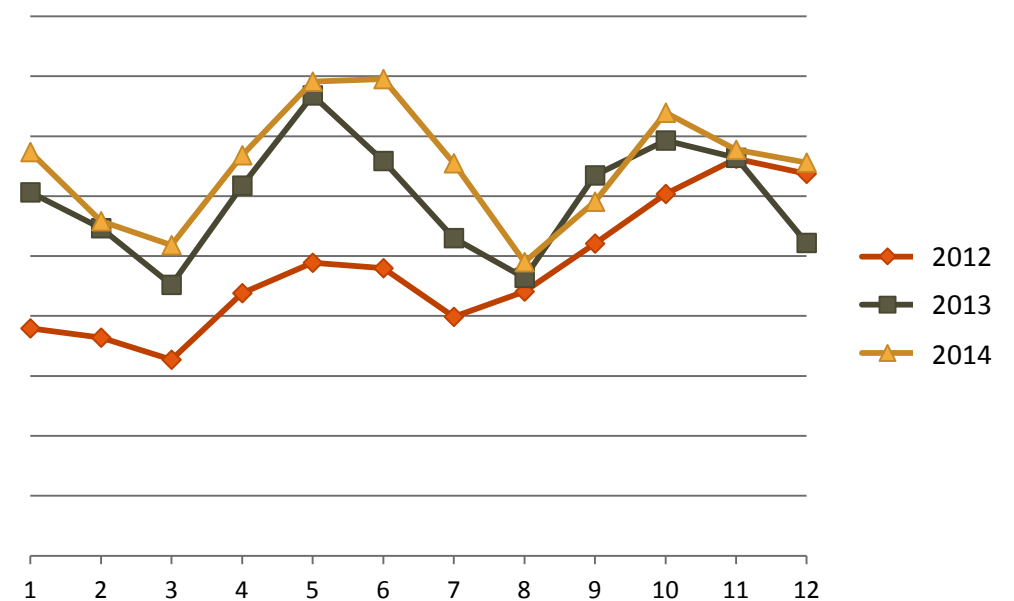
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	Journal Report 1 (R4 Number of Successful Full-Text Article Requests by Month and Journal)											
2	〇〇 Univeristy											
3												
4	Period covered by Report:											
5	2014-01-01 to 2014-12-31											
6	Date run:											
7	2015-07-19											
8	Journal	Publisher	Platform	Journal DOI	Proprietary Identifier	Print ISSN	Online ISSN	Reporting Period Total	Reporting Period HTML	Reporting Period PDF	Jan-2014	Feb-2014
9	Total for all journals	Springer	SpringerLink					99197	6019	61990	9821	7111
10	3 Biotech	Springer	SpringerLink	10.1007/132	13205	2190-572X	2190-5738	20	1	11	0	1
11	3D Research	Springer	SpringerLink	10.1007/133	13319		2092-6731	12	0	7	2	4
12	4OR	Springer	SpringerLink	10.1007/102	10288	1619-4500	1614-2411	53	0	34	0	1

何を見て評価するのか①

- 利用数が多いか少ないか(量的把握)
- 増えているのか減っているのか(推移)



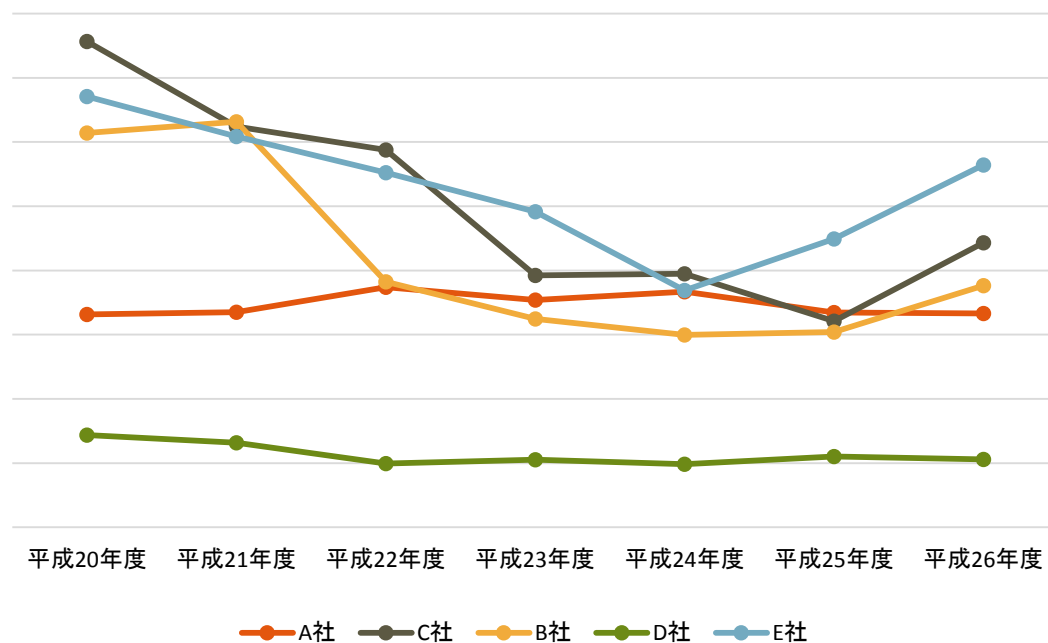
- 月別の利用動向



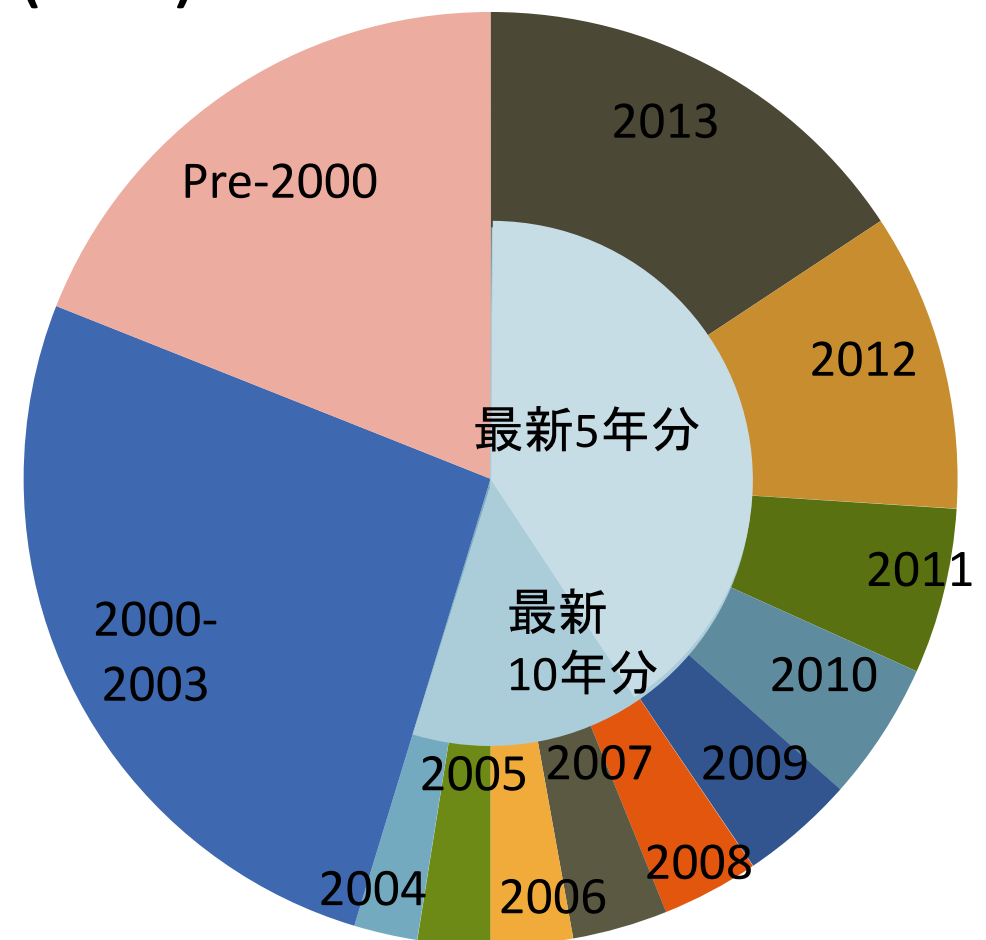
※資料中のグラフはすべてサンプルです。

何を見て評価するのか②

- 利用単価
(購読額÷利用数)



- 出版年別の利用数
(JR5)



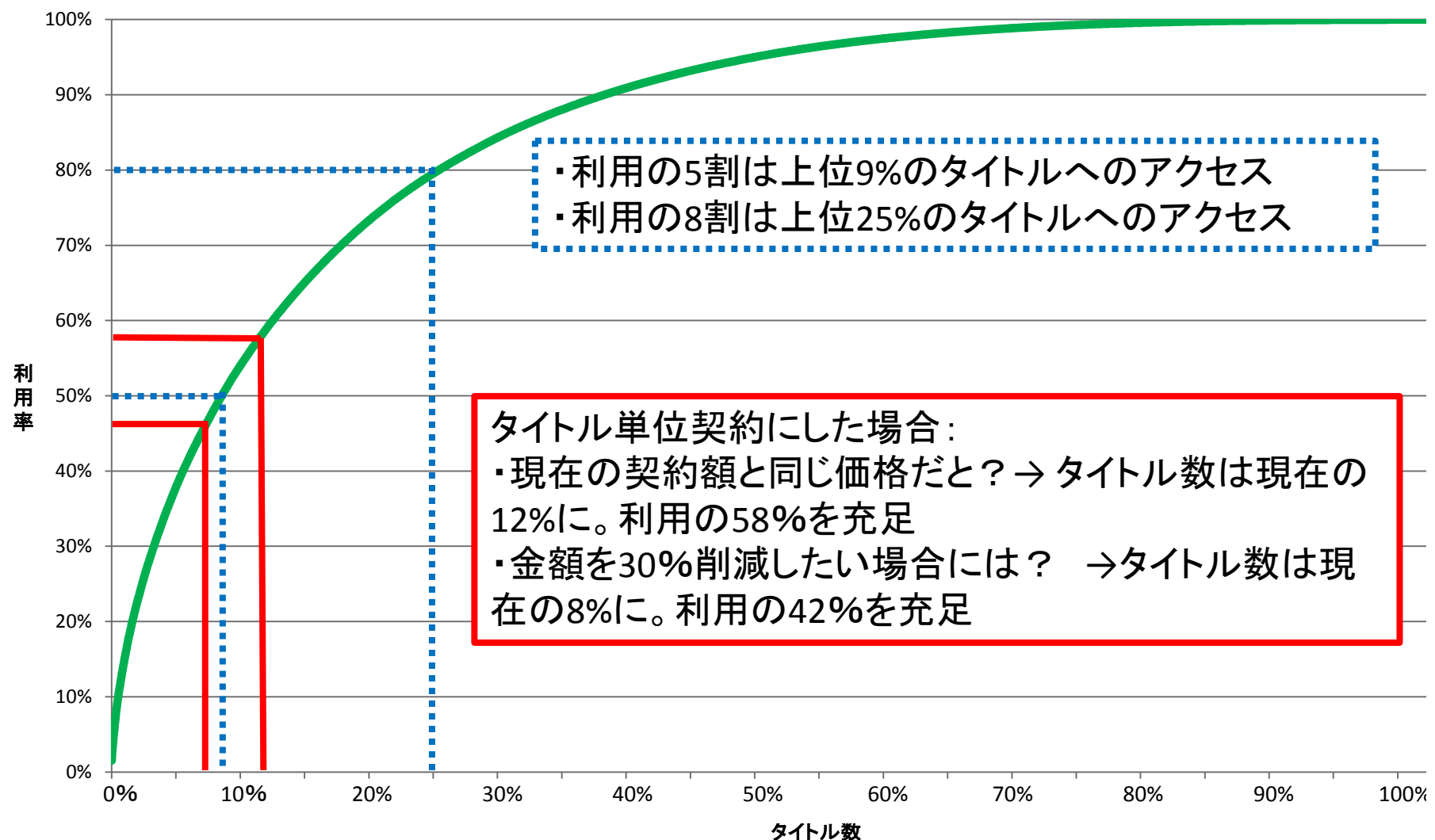
2.2 調査内容1:統計の活用方法

契約見直しへの活用①

- タイトル単位で購入する電子ジャーナルの見直しに使用している大学は多い
- 統計から中止候補を選定する基準
 - ○年間の平均ダウンロード●未満
 - ○年間の平均ダウンロード単価●以上(基準単価はPayPerView価格等を使う、毎年基準単価を変える、基準が存在せず状況に応じて担当者が判断するケースがあり)
 - 1冊あたり利用数(年間ダウンロード数/年間発行冊数)が○未満

契約見直しへの活用②

- 電子ジャーナルパッケージ契約の見直しの検討材料として
 - パッケージに含まれるタイトルのうち、実際にどれくらい利用されているのか
 - タイトル単位で契約した場合の充足率の予測（価格データとの組み合わせ）



契約見直しへの活用③

- 新規購読検討材料として

トライアルの利用統計⇒購入タイトル・パッケージ選定への活用
出版年別統計⇒バックファイルの利用予測・購入

アクセス拒否件数 (JR2,DB3,BR3,BR4で提供)の活用

- 同時アクセス数の制限を超えたことによるアクセス拒否
- ライセンスがないコンテンツへのアクセス拒否(リリース4からの追加項目)

潜在的な需要予測ができる。

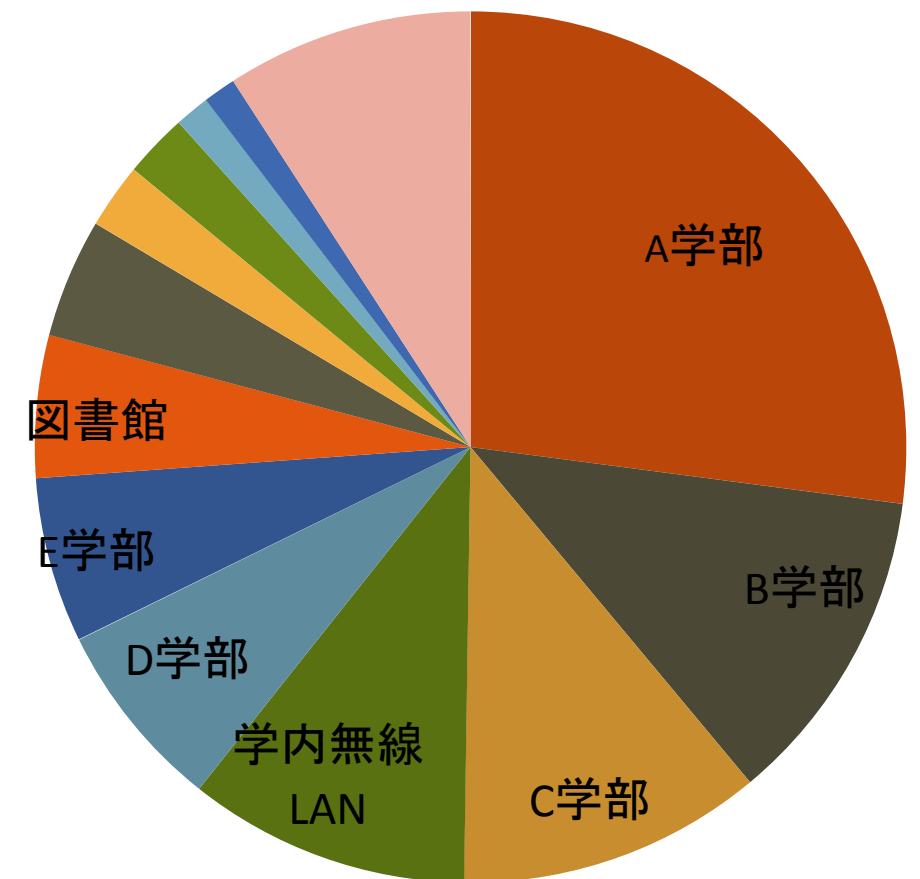
→ 同時アクセス数契約の見直しに利用
新規購読雑誌の選定に利用

経費分担への活用

- IPアドレス別統計
(COUNTER準拠統計にはないため、
一部ベンダーのみ提供)
- プロキシサーバのログ

を利用し、利用場所(学部等)
別の割合を算出

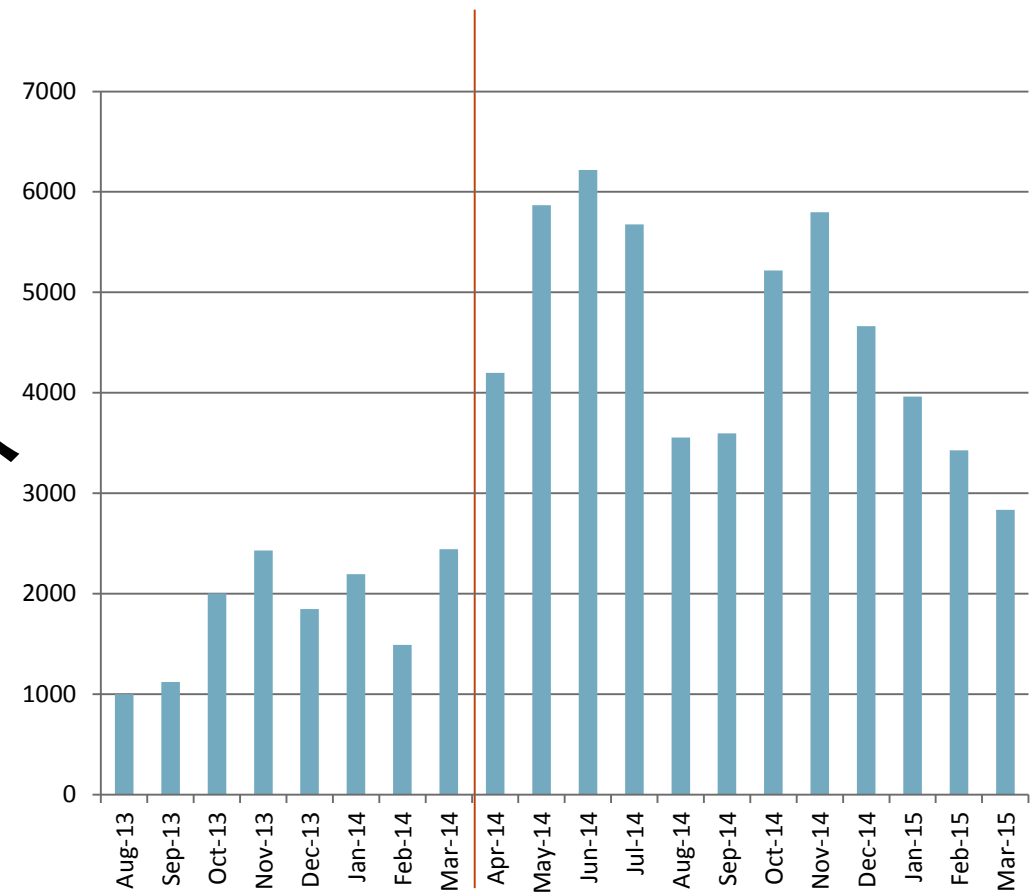
→経費負担割合の検討材料と
するケースあり



利用促進・提供方法の評価

- オリエンテーション・広報による利用促進
- ホームページの構成・案内方法・検索システムの改善

⇒変更前後の変化を検証
より良い利用環境の構築へ
繋げる



統計による評価の難しさ

- COUNTER準拠統計ではない統計との比較
 - 利用場所、利用人数がわからない(IPアドレス別の統計があればある程度分かるが、提供ベンダーが限られる)
 - 利用数が変わる様々な要因
 - 学内での分野別の研究者数
 - 購読している年の範囲
 - タイトル別の特性(発行冊数、論文数、論文ページ数)
 - アクセスの容易さ
 - 広報されているかどうか
 - 利用者がどのような操作をしたか
- ⇒より質的な調査・分析をしなければ分からない要素が大量に存在する
- 利用の多さ≠その雑誌の価値？

統計以外の判断材料

- 意思決定には統計だけではなく、以下のような要素も考慮して判断されるケースが多い
 - 価格
 - インパクトファクター
 - 分野のバランス
 - ILL件数
 - 購読希望調査の結果
 - 利用が少なくとも希望があれば購読
 - 購読希望はないが利用の多いタイトルは購読
 - 部局が希望するタイトルのうち、ダウンロード単価の安いものを
共通経費で一部負担 などの事例あり

2.3 調査内容2:統計の収集・管理

統計収集の実際

- 収集対象のプラットフォームで管理者画面にログイン
→統計を取得 の繰り返し
- 頻度:年1回 (＋必要に応じて)の大学が多い
- 対象のプラットフォーム:ほとんどの大学で30以上
(大手出版社以外も収集対象)
- 収集に関する悩み
 - 対象のプラットフォームが多すぎる
 - 収集方法がわかりにくい (特に学会等独自のプラットフォームのサイト)
 - 代理店に要求しないと統計が提供されない場合がある
 - 管理者用ID/PWの管理が煩雑
 - ベンダーの統合、プラットフォームの変更、仕様変更等への対応

統計管理の悩み

- COUNTER統計が提供されないベンダー⇒ファイルのフォーマットがばらばら(特に国内のDB)
- 集計・加工の煩雑さ
 - 収集した統計の整理が大変
 - 購読情報と対応させる(購読タイトルのみ取り出す、バックファイルの購読を確認、オープンアクセスジャーナルを除く、等)
 - IPアドレス統計と利用場所(キャンパス・部局)を対応させる
 - 複数のプラットフォームで利用できるタイトルの数値を合算

統計管理ツールの利用

- アンケート回答館の半数が以下のいずれかの製品を利用
 - Ustat (ExLibris社 SFXに付属)
 - 360COUNTER (ProQuest社)
 - SUSHIプロトコルによる毎月の自動収集＋手動で収集した統計のアップロード
 - 単一のインターフェースでの統計の保存・管理
 - 条件を指定したデータの抽出・エクスポート
 - プラットフォームを横断した利用状況の把握
 - 価格データと組み合わせた利用単価算出
- 課題
 - SUSHI非対応の統計、COUNTER以外の統計への対応
 - 自動収集のエラーの可能性→データの検証が必要
 - 価格データの入力の手間

[補足]自動収集のための規格:SUSHI

- Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative
 - ベンダーから提供されるCOUNTER準拠の利用統計を、Webサービスを利用して自動収集するための通信プロトコル
 - 2007年 ANSI/NISOが承認
 - 各サイトを巡回して利用統計を取得するために費やす時間を軽減
 - SUSHI Server Registryに登録されているベンダー数は32
 - 図書館側は市販の統計管理ツールを利用するか、システム構築が必要
- <http://www.niso.org/workrooms/sushi/librarians/>

統計の収集・管理の効率化のために

今回の調査では適切な管理方法について十分には考察を行なうことができなかった。→今後の課題としたい。

管理上の工夫のほかに、以下のような働きかけも行なえるのでは？

- ベンダーへの改善要求
 - 必要な統計の提供
 - COUNTERやSUSHIへの対応
 - 管理者画面のインターフェースの改善
 - 統計のフォーマットの改善
- COUNTERに関する動向を知る・意見を伝えてみる
 - ProjectCOUNTER
http://www.projectcounter.org/code_practice.html
 - USUS <http://www.usus.org.uk/>

オンラインコンテンツの利用統計に関心を持つ、COUNTERとは独立したコミュニティが運営するウェブサイト。COUNTERに関するtipsやQ&A

2.4

調査を通じて感じたこと

- 利用統計には様々な制約がある
 - 各大学はそれを知った上で、活用できるものはできる限り活用しようとしている
 - 意思決定に直接利用しないとしても、利用者や執行部とコミュニケーションを始めるスタート地点として欠かせない情報
-
- 基礎的な情報の把握
 - 国内の大学図書館での統計活用パターンの把握
- ↓
- 目的に沿った、統計収集・分析
 - 他の判断材料となるデータの収集
- を、年間の業務計画の流れに組み込んで蓄積していく必要性

3. JUSTICE事務局での研修

事務局での研修環境

- 事務局の日常業務を身近で体感することができる
- 事務局に入ってくるさまざまな情報の共有
- 相談・質問もしやすい環境



出版社との打ち合わせ・交渉への参加とその記録

- 3ヶ月で延べ30回
- コンソーシアムとしての交渉の進め方、考え方を学べる
- 出版社ごとの考え方の違いに触れることができる
- 事務局での事前打ち合わせでこれまでの経緯等が理解できる
- メモの作成を通じて、より理解を深める



JUSTICE関連の会議・行事への運営・参加等

- JUSTICE運営委員会 (6/9)
- 国立大学図書館協会総会(於熊本:JUSTICEブース出展) (6/18)
- JUSTICE広報作業部会 (6/9,8/19)
- JUSTICE電子資料契約実務研修会 in 京都 (7/10)
- 私立大学図書館協会総会・研究大会(於横浜:JUSTICEブース出展) (8/27-28)
- 各種セミナー受講
 - NIIオープンフォーラム(6/11)
 - 学術情報ソリューションセミナー(7/3)

4. 研修を振り返って

- 実務研修受講に際して
- 研修テーマへの取り組みを通じて
- 新しい視点の獲得
- NIIと大学の関係
- いったん日常業務を離れてみる、ということ

ありがとうございました！

